

第5章 交通事故被害者の子弟に対する支援の実態に関する基礎的な調査

・目的

子弟が交通事故により被った精神的影響やその回復への課題を明らかにし、当該子弟に対する交通事故被害者支援の在り方等を検討することができるようにするための基礎資料を収集することを目的とする。

・事業の概要

調査協力者は、特定非営利法人全国被害者支援ネットワークに加盟する被害者支援センターが支援している子弟、各地の被害者支援センターが把握している子弟、その他民間被害者団体が支援し、又は当該団体に所属する子弟及び検討会が推薦する子弟のうち、交通事故発生当時に成人ではなかった者であって、調査実施時点において、高校を卒業した者又は満18歳を超えた者を含め、調査の趣旨及び内容を理解し、協力する意思を示したもののから5名を選定した。

事前に選定された子弟の保護者に対してヒアリングを行い、子弟に対するヒアリング実施の有無の了解を確認した後、保護者も同伴の上、実施した。

・調査結果

(1) 保護者へのヒアリング結果

保護者への各設問に対するヒアリング結果は、以下のとおりであった。

問1 被害にあった時、子弟はどのような状況だったか。

- ・静かだった子が、自己主張が強くなり、激しい性格になった
- ・子どもたちが交通事故のニュースを食い入るように見ていた
- ・自分が死ねばよかった、と子ども達が言っていた
- ・自分ががんばらなければと思ったようだ
- ・不登校になることもなく淡々と学校に行っていた

問2 被害にあった時、あなたはどのような状況だったか。

- ・仕事を継続することができなくなった
- ・事故後1年間、家からほとんど外に出ず、家にいた
- ・友人や親との関係が気まずくなった
- ・頭痛が続き、手や全身がふるえることが続いた

問3 そのとき、子弟に対して、周りの対応はどのようなものだったか。

- ・以前と変わらず子どもと遊んでくれたりした
- ・習い事の送り迎えをやってくれた
- ・何もなかったかのように、普通の対応をしてくれた
- ・近所の人たちは、学校どうだったのなど、普通の言葉かけをしてくれた

問4 そのとき、あなたに対して、周りの対応はどのようなものだったか。

- ・近所の人がおかずなど持ってきてくれた
- ・周りの人は以前と変わらぬ対応をしてくれた
- ・自分の代わりに、子どもたちの世話をしてくれた
- ・学校の先生が自宅に来て、亡くなった子供や残された子供たちの話をしてくれた

問5 被害を受けた後から現在までで、子弟を取り巻く環境で起きたことで、否定的に感じたものにはどのようなものがあったか。

- ・自分が短気になり声も荒げるようになった
- ・亡くなった子供と比べてしまい、二次被害を与えていたのは自分たちだった
- ・「兄弟は死んだの」などを聞かれたことが嫌だったようだ

問6 被害を受けた後から現在までで、子弟を取り巻く環境で起きたことで、肯定的に感じられたことにはどのようなものがあったか。

- ・自分のできる範囲で見守ってくれた
- ・近所の人子どもたちを遊びに連れて行ってくれた
- ・習い事の送迎をしてくれた
- ・友人が普通に接してくれた

問7 被害を受けた後から現在までで、あなたを取り巻く環境で起きたことで、否定的に感じたものにはどのようなものがあったか。

- ・理不尽さを感じ、社会から孤立した感があった
- ・人生ががらりと変わり、全く違う生活になった
- ・事故にあった特別な家だから、と見られている気がした
- ・親はしっかりしなければと言われた

問8 被害を受けた後から現在までで、あなたを取り巻く環境で起きたことで、肯定的に感じられたことにはどのようなものがあったか。

- ・支援団体からの助言
- ・学校の先生が子供たちの様子を知らせてくれた
- ・支援団体から子供たちへの接し方を教えてもらった
- ・周囲の人が普通に接してくれた

問9 被害を受けた後から現在までで、子弟の支えになってきたものは何だったか。

- ・家族や周りの人の存在だと考える
- ・友人関係が支えになっていたと思う
- ・亡くなった兄弟は悪くないとする考えと、親を支えなければならない、という気持ちが支えだったと思う。

問10 被害を受けた後から現在までで、あなたの支えになってきたものは何だったか。

- ・伴侶や自分の兄弟、家族の存在が支えである
- ・亡くなった我が子が支えである

- ・子どもの成長を見守ってくれる人の存在が支えである
- ・周りの人、友達及び自助グループに参加している人などが支えである

問1 1 その他、子弟を支えるという意味において、当時こうであれば良かったと思うものの、今後こうであれば良いと思うものというものがあつたか。

- ・犯罪を犯罪であると捉えられるような環境と対策が必要である
- ・事件現場を目撃した子どもたちへの相談機関
- ・スクールカウンセラーなどを交えて話ができればもっとよかった
- ・子ども同士で話せる場があればよかったと思う

問1 2 その他、あなたを支えるという意味において、当時こうであれば良かったと思うものの、今後こうであれば良いと思うものというものがあつたか。

- ・子どもを預けられる所があるととても支えになる
- ・信頼できる支援団体や遺族の会を行政が情報提供してほしい
- ・自分が疑問に思ったこと、悩んだことについての情報が得られ、信頼できて長期的に相談できるところが、行政も含めて必要と思う
- ・子どもの自助グループがあるとよい
- ・身近なところで相談でき、身近なところで情報が得られること

(2) 子弟へのヒアリング結果

子弟への各設問に対するヒアリング結果は、以下のとおりであつた。

問1 被害にあつた時、あなたはどのような状況であつたか。

- ・嫌な夢でも見ているのかと思つた
- ・死ぬとはどういうことなのか、どこに行くのだろうと考えていた
- ・父や母がとても落ち込み、悲しみ、そして自分を責めていた。それを見ていて、自分も自分を責めた。自分が死んでいれば良かったと考えた

問2 そのとき、周りの対応はどのようなものであつたか。

- ・親が自分のことを気にかけてくれていた
- ・先生が、友人の言葉に対して怒ってくれたり、かばってくれたりした
- ・親とは会話が減り、家の手伝いが増えた
- ・先生が、「飛び出しはしていない」とみんなの前で兄弟の名誉を守ってくれた

問3 被害を受けた後から現在までで、あなたを取り巻く環境で起きたことで、否定的に感じたものにはどのようなものがあつたか。

- ・友人から「死んだのか」と言われたのは嫌だつた
- ・他の兄弟が乱暴になつたりしたのは嫌だつた
- ・亡くなつた兄弟が霊となつて人を呪っているといううわさに傷ついた

問4 被害を受けた後から現在までで、あなたを取り巻く環境で起きたことで、肯定的に感じられたことにはどのようなものがあったか。

- ・学校の先生は、思い出さないようにしてくれていたと思う
- ・親は、一緒にいようとしてくれる
- ・亡くなった兄弟の担任が、1年間亡くなった兄弟の机にお花をあげてくれた
- ・亡くなった兄弟の友達とそのお母さんがよく来てくれた

問5 被害を受けた後から現在までで、あなたの支えになってきたものは何だと思うか。

- ・友人が励ましてくれた
- ・亡くなった兄弟が支えであった
- ・遺された他の兄弟同士で支えあった

問6 その他、あなたを支えるという意味において、当時こうであれば良かったと思うもの、今後こうであれば良いと思うものというものがあつたか。

- ・弱音を吐ける場所があつたらよかつたと思う
- ・相談は、特別な機関よりも、母や母の友人など自分の周りにいる人のほうがしやすい。特別に何かするのではなく、普通に接してくれる、普通に遊んでくれる人とかがいると助かる

・本章のまとめ

ヒアリング結果から、両者とも周囲に望んでいることは、亡くなった兄弟のことを忘れないでほしい、特別な対応ではなく以前と同様に自然に接してくれること及び本音や弱音を言える場所がほしい等が挙げられる。また、周囲は、子弟及びその保護者に対して、心ない言葉を投げかけることで二次被害を生じさせてしまうこともある。

さらに、保護者は、事故直後に子弟に対して十分な養育やケアができなかったことに気がつくと、強い罪悪感を抱くことがある。このため、ヒアリングでは、「親としてのその人」を支えるために「周りの人が子どもを連れ出してくれる」等の養育の手助け、及び「子どもへの接し方などの助言を受ける」等の子どもへの対応の助言や心理教育も必要であると語られていた。

したがって、周囲の者たちは、交通事故被害者の子弟及びその保護者に接する際は、ごく自然な態度と同時に繊細な気持ちを持って接するとともに、保護者の罪悪感が惹起された場合の対応も合わせて考慮する必要がある。